九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Thoreauの晩年の社会改革思想 : ”LifeWithout Principle”を中心として

林, 南乃加
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1456052

出版情報：Comparatio. 17, pp.32-43, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

Thoreau の晩年の社会改革思想
—"Life Without Principle"を中心として—

林　南乃加

はじめに

Henry David Thoreau の死後出版となった"Life Without Principle"は、1863 年 10 月の *The Atlantic Monthly* に掲載された、社会改革についてのエッセイである[1]。本エッセイの土台となったのは、1854 年から 56 年にかけて 6 回行われた、"What Shall It Profit"と題する講演と、1859 年と 60 年にかけて 2 度行われた"Life Misspent"という講演である(Bradley P. Dean and Ronald Wesley Hoag 360-61)。これらの講演が 6 年間に合計で 8 回行われたことから、"Life Without Principle"は、Thoreau が *Walden* (1854)を出版してから 1862 年に死ぬ前の年に至るまで、比較的長い期間にわたって継続的に推敲が重ねられていたことが窺われる。

周知のように、19 世紀中葉の合衆国は、南北諸州が、奴隷州になるか自由州になるかをめぐって対立し、緊迫した政治状況にあった。当時、領土拡大を狙っていた合衆国は、新しい州を奴隷州とするか自由州とするかについて、熾烈な争奪戦を繰り広げていた。1820 年のミズーリ妥協、50 年の逃亡奴隷法の強化、54 年のカンザス・ネブラスカ法の制定、そして 61 年の南北戦争に至るまで、両州の対立は、もはや妥協では解決できなくなるほどに深まっていた。

1817 年に生まれ、62 年にその生涯を閉じた Thoreau は、そのような南北戦争前夜の、動乱の半世紀を生きた人である。Thoreau の社会改革論が顕著に表れたエッセイとしては、"Resistance to Civil Government"(1849)と、"Slavery in Massachusetts"(1854)が筆頭に挙げられるが、それ以降の講演原稿を基にした"Life Without Principle"(1863)や"A Plea for Captain John Brown"(1859)は、それらの 2 つのエッセイの延長線上にあり、Thoreau の晩年の社会改革思想の一端として位置づけられるとともに、Thoreau の社会改革思想の行方を追う上で重要な資料である。本稿は、1859 年に起きた John Brown の反乱を弁護するエッセイ"A Plea for Captain John Brown"における Thoreau の英雄像にも注目しながら、Thoreau が晩年にどのような社会思想を抱いていたのかを、"Life Without Principle"を中心として検討してみたい。

1.　人間の「精神的自殺」と Thoreau の諦念

1854 年の"Slavery in Massachusetts"発表後、Thoreau は奴隷解放運動の組織の中で新しい重要人物となった。しかし Thoreau はやがて Ralph Waldo Emerson と同様に、大勢の人々

と一緒に行動することを躊躇するようになっていた。"Life Without Principle"の土台となった"What Shall It Profit"という講演を始めたとき、Thoreau はすでに奴隷解放運動の一線からは身を引き、一市民としての立場から意見を述べるようになっていたのである(Sandra Harbert Petrulionis 106)。

南北戦争前夜に発表された"Life Without Principle"では、"Resistance to Civil Government"や"Slavery in Massachusetts"よりも明らかに奴隷制度への言及は少なくなっている。本エッセイでは、産業資本主義が隆盛することで生じた人間精神への弊害が問題視され、"Let us consider the way in which we spend our lives."という一文に窺われるように、社会そのものよりも、身近な人々の生き方や日常生活を観察することについて関心が寄せられている。"Resistance to Civil Government"で Thoreau は、領土拡張のためメキシコへの侵略戦争を図る政府は、戦争に反対する市民の声を聞き入れず、常識と良心に逆らった兵士を作り出していると述べており(65)、また、"Slavery in Massachusetts"においては、政治そのものへの不信を強く表明し、政治は道徳を反映しておらず、道徳上の正義を保っていないと明言している。さらに Thoreau が、". . . I cannot persuade myself that I do not dwell *wholly within* hell."と述べる点には、政治に対する Thoreau の絶望感が"Resistance to Civil Government"においてよりも一層強くなっていることが窺われる("Slavery in Massachusetts" 106 italics original)。"Resistance to Civil Government"と"Slavery in Massachusetts"で、Thoreau はこのように政府や政治のあり方を批判しているが、"Life Without Principle"においては、その批判の矛先は、政治組織そのものよりも、より広範囲なものとなり、国民の生き方に向けられている。

"Life Without Principle"の冒頭で Thoreau は、日々絶え間なくビジネスに執心する人々の生き方を危惧し、金を稼ぐことを目的とした人間の堕落を指摘し、金を稼ぐためだけに仕事をすることは怠惰な生活よりも劣った生活を送ることであると断言している。Thoreau によると、労働による賃金は"something less than a man"になることで得られるのだが(158)、Thoreau は労働そのものを否定しているのではなく、むしろ労働が絶対視され、労働によって個人が「統制」("regulate" 157)され、人間としての精神生活が失われてしまうことに脅威を覚えているのである。それゆえ、労働が生きる目的になっている人々に対して Thoreau は"If I should sell both my forenoons and afternoons to society, as most appear to do, I am sure, that, for me, there would be nothing left worth living for."と断言している(160)。カリフォルニアへと一攫千金をめざして移動する人々については"the greatest disgrace of mankind"(162)であると、最大級の非難を投げかけており、金銭に執着する人々の最終結果は「木に首を吊るして死ぬ」ことだと述べている("The conclusion will be, that mankind will hang itself upon a tree." 163)。

また Thoreau は、メディアによって伝えられるニュースは「細菌の胞子」("sporules of fungi")のようなくだらないもので、それらは空気中に漂い、私たちの精神の表面にある「葉状体」("*thallus*")に付着し、そこを基盤に寄生体を育てるのであり、私たちの精神("genius")

のための情報にはなっていないと指摘している("Life Without Principle 170 italics original)。Thoreau は当時のメディアを、国民の状況を象徴的に反映する媒体として見なしていたようである[2]。"Slavery in Massachusetts"では、新聞を"the gurgling of the sewer"あるいは"a leaf from the gospel of the gambling-house, the groggery and the brothel"であると批判しているが(101)、"Life Without Principle"においても、ビジネスや労働のために精神性を犠牲にする人間は、精神の内部を徐々に損なうことになると主張している。経済的利益ばかりに心を奪われた人間が、自ら招いた精神的な「死」に瀕していることを Thoreau は憂慮しているのである。以下の引用で Thoreau は、神聖な精神だけが説くことのできる事実を捨て去るわけにはいかないと述べ、神聖な思想が宿る「聖域」("*sanctum sanctorum*")が、つまらない会話や新聞の細々とした記事などによって土足で汚されているという弊害を問題視している。

> I find it so difficult to dispose of the few facts which to me are significant, that I hesitate to burden my attention with those which are insignificant, which only a divine mind would illustrate. Such is, for the most part, the news in newspapers and conversation. . . Think of admitting the details of a single case of the criminal court into our thoughts, to stalk profanely through their very *sanctum sanctorum* for an hour, ay, for many hours! to make a very bar-room of the mind's inmost apartment, as if for so long the dust of the street had occupied us, —the very street itself, with all its travel, its bustle, and filth had passed through our thought's shrine! Would it not be an intellectual and moral suicide? (171-72 italics original)

Thoreau がことさらにニュースをやり玉にあげるのは、ニュースが伝える細々としたつまらない事柄が、「思想の神殿」("our thought's shrine")を汚してしまうからである。Thoreau はそうした状況を人間の精神的な自殺行為であると見なしている。ここでいう"moral suicide"とは、本エッセイで Thoreau が、人間は未だに"the slave of an economical and moral tyrant"(174)であると述べている箇所と関連しているのだが、この考え方は、Thoreau が *Walden* (1854)の"Economy"の章で、物質文明に過度に浴した人間が、自分自身の"the slave-driver"となっていると批判している一節を想起させる。"Economy"では人間は絶望状態であることに気付いてもいないほど酷い状態にあるとされ、自分自身を奴隷化することは、南部の奴隷制度よりも悪いことであるとされている(*Walden and Resistance to Civil Government* 4-5)。

"Life Without Principle"が推敲されていた期間に属する 1860 年 12 月 4 日の日記には、奴隷制は必ずしも南部特有の制度ではなく、理性と良心を放棄するところではどこにでも、奴隷制が存在するのだという主張が見られる(*The Writings of Henry David Thoreau*, Vol. 20,

292)。人間が精神的な意味において奴隷化しているという惨状を、*Walden* 出版以後も依然として批判しているのであるが、先述の"moral suicide"という表現には、人間そのものが奴隷化したことに対する Thoreau の強い危機感が見られる。このように Thoreau は、自由州の北部の人間が自ら精神性を喪失していることに対して、黒人奴隷制度よりも深刻な意味での奴隷状態を見出しているのである。その点において本エッセイは、Len Gougeon が指摘するようにアメリカ社会の著しいモラルの欠如を非難する真のエレミヤであるといえるのであるが(206)、"Resistance to Civil Government"や"Slavery in Massachusetts"と比べて、その非難の度合いは強まっているといえる。

2. John Brown の弁護に見る Thoreau の英雄像

"Life Without Principle"と並行して、Thoreau の晩年の社会思想を辿る上で考慮すべきもう一つのエッセイは、"Life Without Principle"の土台となった原稿が講演されていた間に発表された"A Plea for Captain John Brown"である。1859 年 10 月 16 日、John Brown[3] と、白人と黒人を含む 18 人の部下が、ヴァージニア州のハーパーズフェリー連邦兵器庫を襲撃した。襲撃の目的は、黒人奴隷に武器を与えて反乱を起こさせ、奴隷を解放させようとするものであった。しかしこの襲撃は失敗に終わり、Brown の部下のほとんどは殺された上、Brown は 2 か月後に州政府への反逆罪として処刑された。

この襲撃事件が Thoreau の耳に入ったのは 10 月 19 日で、Thoreau が Emerson の自宅にいたときであった。Thoreau は暴力を嫌っていたものの、原理原則のために自分の命をも犠牲にした Brown を弁護しようと立ち上がり、10 月 30 日に講演を行うと宣言した(Walter Harding 417)[4]。他の奴隷制反対論者は Thoreau の講演に反対したが、Thoreau は予定どおり、"The Character and Actions of Capt. John Brown"と題する講演を 10 月 30 日にコンコードで、11 月 1 日にボストンで、同月 3 日にウスターで行っている(Bradley P. Dean and Ronald Wesley Hoag 361)。

Brown の率いた襲撃は、解放しようとした黒人にも犠牲者を出した悲惨な行為であったにもかかわらず[5]、超絶主義者の中で誰よりも早く Thoreau が弁護したのはなぜだろうか。10 月 19 日の日記で Thoreau は John Brown の暴動に対する反応を憂慮し、Brown が暴力に訴え、政府に反逆し、自分の人生を投げ捨てた人として見くびっていることを嘆いている(*The Journal* 1837-1861, 584)。続けて同日の日記に記されている次の注目すべき一節は、"A Plea for Captain John Brown"にもそのまま掲載されているものである。以下の引用部分で Thoreau は、私たちの敵は私たちの内部にあるのであり、そのために「あらゆる種類の奴隷制度」が生まれるのだと主張している。

> Our foes are in our midst and all about us. There is hardly a house but is divided against itself, for our foe is the all but universal woodenness of both head and heart, the want of vitality in man, which is the effect of our vice; and hence are

> begotten fear, superstition, bigotry, persecution, and slavery of all kinds. . . . The curse is the worship of idols, which at length changes the worshippers into a stone image himself; and the New Englander is just as much an idolater as the Hindoo. This man was an exception, for he did not set up even a political graven image between him and his God. (120)

Thoreau は、ニューイングランドの人々を、頭と心が硬化した偶像崇拝者に重ねているが, Thoreau にとって John Brown は、自分と神との間に「政治的な彫像」を立てなかった人間、すなわち偶像崇拝者であることを免れた人間なのである。

Thoreau によると、Brown は"a man of rare common sense and directness of speech, as of action; a transcendentalist above all, a man of ideas and principles"とし、Brown を自分と同じ超絶主義者であると述べている(115)[6]。Ralph Waldo Emerson は、1859 年に行った Brown についての演説で、Brown を「ニューイングランドの最良の血筋の美しい見本」であり、「理想主義者」であるとし、「彼の信念たるや、自分の人生はそれらすべてを実行するためであった」と弁明している(『奴隷制とアメリカ浪漫派』184, 187)[7]。Thoreau も Emerson と同様に、Brown を、奴隷解放のために理想を掲げるだけではなく実行に移した人として讃えているのだが、具体的に Brown を"firmer and higher principled"(113)であると弁護している。その原則とは、当時、Emerson や Thoreau などの超絶主義者たちが、奴隷制反対論を唱えるために説いていた"higher law"が念頭に置かれていると考えられる。Thoreau にとって Brown の反乱は"higher law"に従うべく、奴隷を解放するという「大義」("cause" 137)にまっしぐらに身を捧げる行為なのであった。

Thoreau によれば、そのような Brown の反乱鎮圧に加わったのはヴァージニア州だけではなく、マサチューセッツ州政府を支配し服従させている人たちであった。そのような政府は人間の"the noblest faculties of the mind"を真に代表する国家ではなく、"monster"なのであり、自らの罪として報いを受けるべきであった(129-130)。共和党の新聞編集者たちも Brown らを当時の政治的状況に照らし合わせて"deluded fanatics"、"mistaken men"、"insane"、"crazed"(123)などと呼んでおり、それに対して Thoreau は以下の引用において、Brown を"insane"と呼ぶべき人々こそが"insane"であることを主張している。

> Insane! A father of six sons, and one son-in-law, and several more besides, —as many at least as twelve disciples, —all struck with insanity at once; while the sane tyrant holds with a firmer gripe than ever his four million slaves, and a thousand sane editors, are saving their country and their bacon! Just as insane were his efforts in Kansas. Ask the tyrant who is his most dangerous foe, the same man or the insane. (126)

Brown を“insane”と呼ぶ人々が正気であるとすれば、400 万人の奴隷をつかまえているのは正気の暴君であり、さらに 1,000 人もの正気の新聞編集者たちが自分の国と命を救おうとしている。そうなれば Brown のカンザスでの貢献[8]は狂気の沙汰ということになる。そこで Thoreau は、正気の暴君と狂気の人物のどちらが危険な敵かと問いかける。ここで記されている「正気の暴君」とは、前章で述べた“Life Without Principle”における“an economical and moral tyrant”(174)を逆説的に揶揄していると考えられる。Thoreau にとっては、精神的暴君の奴隷になり、“moral suicide”(172)を図った州政府の人間やメディアのほうが、人間を石化する狂気の暴君なのであり、その狂気の中で Brown は、人間として正真正銘の正気の行動をとった人物なのである。狂気の州政府とメディアが、正気の人間である Brown を狂気と呼ぶことで、自らの狂気を正当化しているのであり――あるいは自分たちの狂気にさえ気がついていないのだが――正気の州政府とメディアが狂気の人間を狂気と呼んでいるのではない。さらに、そのようなメディアの報道を一般大衆が信じて、Brown を“a dangerous man”や“undoubtedly insane”などと呼んでいることをも Thoreau は批判している(119)。Thoreau の批判の矢は宗教や法律関係者にも向けられており、Brown の反乱を正しく理解することのできない牧師は“*wolves* in sheep's clothing”(120 italics original)と揶揄され(137)、国家は“counterfeiting law-factory”であると批判されている(137)。Thoreau によると、彼らにも精神的な意味での暴虐や狂気が潜んでいるのである。

そのような北部の一般大衆とは対比的に、Brown は肉体よりも理想を尊重し、人間性の尊厳のために立ち上がるべく、不正な法には徹底的に抵抗し、神の命じることに従った(125)。その抵抗が武力を伴った暴力行為であったにもかかわらず、Thoreau が Brown の精神を尊重する背景には、前述のように Thoreau が、州政府やメディアを、精神的な意味において自らを硬化させて石化させた偶像崇拝者であり、さらに自らを“an economical and moral tyrant”を支持する奴隷状態に置いたものと見なしていることが関連している[9]。偶像崇拝者となった人間が、人間を単なる肉体的存在あるいはそれよりも劣った存在として不当に扱ったとすれば、Brown は自分の肉体を犠牲にしてまでも正義に従ったのである。Brown の暴力行為によって引き起こされた事件のいきさつについて、Thoreau が一切触れていない点には、Brown が取った手段よりも、その精神的な動機を重視していることが窺われる。その上で Thoreau は、Brown が武力を用いて奴隷を解放しようとしたことを、“a perfect right to interfere by force with the slaveholder”とし(132)、“too fair a specimen of a man to represent the like of us”として強調している(127)。

Thoreau にとって、Brown の反乱は、北部諸州の衰えた脈搏をよみがえらせ、商業的政治的繁栄によっては不可能であったほどの大量の血液を、その血管と心臓に送り込んでいる事件であり(135)、精神的に自殺してしまった人間に、生きる目的を呼び覚ませた。その意味において Brown の命は“immortal life”であり、Brown は 400 万人の奴隷を救った救世主ともいうべき“Angel of Light”で、人間の精神の中で生き続け、人間の精神を守るとして讃えるべき光の天使という存在なのである(136-37)。この点において、Harding が指摘するように、

「Thoreau は Brown の行動よりも理想のほうに、そして、彼が行ったことよりも勇気のほうに魅了されている」といえる(418)。

以上のように Thoreau が Brown の行動を弁護するもう一つの背景には、Thoreau 自身の英雄像にも一つの関連が窺われる。Thoreau はエッセイ"Resistance to Civil Government"で、州政府を、人間を奴隷のように扱う暴虐で不当な"the *slave*'s government"と見なし、一人間として良心に従った行動を自ら取った経緯について述べ、"Is there not a sort of blood shed when the conscience is wounded? Through this would a man's real manhood and immortality flow out, and he bleeds to an everlasting death. I see this blood flowing now."と主張している(77)。Thoreau が強調するのは、"the *slave*'s government"に対して、すべての人間が革命の権利を認識すべきであるということである。そのような信念に基づいて投獄された Thoreau が、獄中から見た町の様子を、以下のように記している点に着目したい。

> It was like travelling into a far country such as I had never expected to behold, to lie there for one night. It seemed to me that I never had heard the town clock strike before, not the evening sounds of the village; for we slept with the windows open, which were inside the grating. It was to see my native village in the light of knights and castles passed before me. (82)

Thoreau はこの数行のほとばしるかのような記述において、場所と時間を隔てた遠い国に旅するかのように、獄中で精神の自由を得たことを喜んでいるかのようである。生まれ故郷の村はあたかも中世の光に照らされ、コンコード川はライン川の流れに喩えられている。そして、目の前には騎士や城の光景が繰り広げられている。この幻想的な描写が示すのは、Thoreau が獄中で肉体的には拘束されながらも、より自由で、開放的で、良心と精神の宿る自分の居場所を得たということである。小野和人が論じているように、この情景は、Thoreau なりの個人的な戦いを挑もうとした一種の「聖戦」、すなわちメキシコに新領土を広げて奴隷制度を敷こうとしているマサチューセッツ州に対して、自己流のやり方で「宣戦布告」をしようとする、その精神的ヴィジョンと対応している(『「ソローとライシーアム」ーアメリカ・ルネサンス期の講演文化』170)。Thoreau は牢獄の中で想像力を駆使し、肉体を拘束されている状態とは裏腹に、自由を求める精神の強さを認識する。騎士が駆ける光景には、政府に対して Thoreau が勢いよく戦いを挑むかのようなイメージが想起されるが、同時に Thoreau は、州政府への自分の抵抗を、自己犠牲を払ってでも自由のために戦う英雄的行為として誇張しているとも解釈できる。Thoreau が"Resistance to Civil Government"において、投獄された自己の抵抗行為を騎士の幻影として英雄化しているとすれば、同様に Brown についても自分の命を犠牲にしてまでも良心と自由と正義のために血を流して戦った人物として英雄化したといえよう。この点には、Thoreau 自ら不当な政府に抵抗したことによって投獄されたときに思い描いた騎士の英雄像が、Brown の英雄像に投影されるかのように呼応してい

ることが窺える[10]。

Thoreau は、Brown が武力という暴力的手段を行使したことの現実よりも、自己の理想や希望に引きつけた形で Brown の精神を崇高化し、英雄化しているといえる。Brown が過激にも武力を行使して奴隷制を直接的に阻止しようとしたことが Thoreau の共感を呼んだのは、奴隷制度を維持し、人間の精神性を日々抹殺していく政府や国家の脅威や暴力に対抗することが必要であったためであり、それは避けがたい一選択肢であったと考えられる。

3. 一人間としての改善策

Thoreau が John Brown の反乱を徹底的に弁護した背景には、人々が未だに"the slave of an economical and moral tyrant"に堕しており、"an intellectual and moral suicide"を図っているのだという、"Life Without Principle"における社会批判が息づいている。Thoreau が抱く社会全般に対するそのような批判は、"A Plea for Captain John Brown"における、John Brown の反乱の意義を理解できない州政府やメディアや牧師や一般大衆は、精神的な意味で自らの奴隷となっているのだという批判にも通底している。1854 年以降、奴隷制反対論者という立場から、一市民として幅広く社会を観察する立場に転じた Thoreau が、"Life Without Principle"において問題とするのは、奴隷制反対ではなくむしろ、人間が精神的な奴隷状態から脱し、一人間として「正気」("sane" 171)を取り戻し、道徳的自由を回復することである("What is the value of any political freedom, but as a means to moral freedom?" 174)。人間の精神が永遠に汚されかねないと危惧する Thoreau は、以下の一節で、自分たちの精神を再び神聖なものとして用心ぶかく献身的に扱い、子供に接するように精神に向き合うべきであると説いている。

> If we have thus desecrated ourselves,—as who has not?—the remedy will be by wariness and devotion to reconsecrate ourselves, and make once more a fane of the mind. We should treat our minds, that is, ourselves, as innocent and ingenuous children, whose guardians we are, and be careful what objects and what subjects we thrust on their attention. (173)

自らの神聖さを汚してしまった人間が取るべき救済策は、精神の神殿を再び取り戻すことである。ここで Thoreau がいう「精神の神殿」とは、神聖な法則("the divine law" 373)を認識できる神聖な人間の精神である。先述のように Thoreau は、"divine mind"によって明らかにすることのできる事実こそが重視されるべきであると考え、日常のささいな事実やくだらないメディアの報道によって、人間の精神が冒涜されていることを批判していたが、以上の一節には、そのような人間の"divine mind"を取り戻すべきだという主張が集約されている。Howard Zinn によると"Life Without Principle"の最終原稿のタイトルは"The Higher Law"であったが("Introduction" 19)、本エッセイの背景には、超絶思想家として"higher law"を重

視する Thoreau の信念が潜んでいるといえる。本エッセイで Thoreau は、社会や国家やメディアに対して批判を呈するだけでなく、むしろそれらを構成する一人一人の個人に目を向け、神の法則を守る精神を取り戻すべきことを説いているのである。

まとめ

19 世紀前半から中葉にかけて、合衆国は奴隷州と自由州に分裂した緊張状態にあり、年月の経過とともに黒人奴隷制度の問題は、もはや北部の妥協的な解決の模索は行きづまりの様相を呈していた。Thoreau が 1849 年に発表した"Resistance to Civil Government"から 1854 年の"Slavery in Massachusetts"、1859 年の"A Plea for Captain John Brown"、そして 1863 年の"Life Without Principle"に至るまで、14 年の経過があるが、それらのエッセイに一貫して見られるのは、北部において政府や社会、ひいては人間そのものが、自らの奴隷となり、人間としての精神性を喪失しているという考え方である。Thoreau が Brown を英雄化した背景には、人間の精神性を否定する暴虐的な州政府やメディアや一般大衆に対する Thoreau の強い憤りが見られるが、"Life Without Principle"に窺われるように、Thoreau は晩年において、人間が人間以下となり、精神的に自殺してしまった惨状を厳しく問うており、国家そのものに対する非難の度合いが一層強まっているといえる。そのような批判のもとで Thoreau が呈示するのは、一人間としての神聖な精神を取り戻す必要性であり、それは政府ではなく個人の次元における精神的改革なのである。

注

1. 1973 年には Wendell Glick の編集により Reform Papers において掲載されている (Wendell Glick 359)。
2. クロード＝ジャン・ベルトランによると、アメリカに新聞が普及したのは 19 世紀である。当時のアメリカは、移民が流入した結果、人口が二倍になり、都市化が続いていた。1800 年には新聞の数は 235 紙しかなかったが、1820 年の新聞の数は 512 で、1828 年に A. ジャクソンが大統領に就任した頃には、新聞の数は 900 となり、読者は政治にたずさわる富裕階級であった。それに続く 30 年間に蒸気船、鉄道、電信機とならんで、安物の紙ではあるが鉛版印刷で速く刷れる新聞が発達した。この頃、一般大衆の興味を引き、正統の支配から自由になった大新聞が生まれ、紙面は以前より魅力に富み単純なものとなった。1833 年に 1 部 1 セントで売られた「ニューヨーク・サン」の 1 セント新聞（ペニー・プレス）はあらゆる新聞に影響を与え、重要視されていた。Thoreau が"Slavery in Massachusetts"において、"The newspaper is a Bible which we read every morning and every afternoon, standing and sitting, riding and walking."(100)とし、人々が日々、聖書のように新聞を読んでいると皮肉的に述べていることにも関連が窺われるように、1850 年代の当時、新聞の数は 2300 に増えており、政治的な記事を掲げた初期のころと、

過大ともいえる商業主義との間にはさまれたこの時期は、新聞の全盛時代であった(『アメリカのマスメディア』17-19)。

3. John Brown(1800-1859)はコネティカット州出身で、父親と祖父はアメリカ独立戦争で軍務に服していた。Brown は5才のとき、オハイオ州に移り、カルバン主義の敬虔さとフロンティア地帯の荒々しい流儀を身につけた。Brown は特に Oliver Cromwell や Napoleon に傾倒し、聖書に親しんでいた。Brown が黒人に共感を覚えていたことは Brown の際立った特徴であり、彼は白人と黒人は平等であることを信じて疑わなかった(Merrill D. Peterson 3)。部下の人数については諸説あり、22 人とする説もある。
4. 10 月 19 日以降の日記で Thoreau は、John Brown に対する隣人の冷淡な反応を嘆き、Brown を賛辞しているが、これらの日記の内容は 30 日の講演内容の一部となっている。
5. Brian McGinty は、この襲撃戦のいきさつを詳細に記している。McGinty によると最初の犠牲者は皮肉にも黒人奴隷 2 人であり、その後、農業者で奴隷所有者の白人 George W. Turner や、ハーパーズフェリーの町長である Fontaine Beckham などが犠牲となった。Beckham の甥の息子 Henry Hunter が Beckham の死を知ると憤慨し、Brown の部下で捕虜となっていた William Thompson を見つけるやいなや銃殺した(52-53)。激しい銃撃戦となり、Brown は部下として含めていた自分の息子 2 人も失った(57)。
6. Thoreau が Brown と初めて会ったのは 1857 年晩秋であり、Brown がコンコードに F. B. Sanborn を訪れているときだった。このときの Brown はすでにカンザスで奴隷制反対運動の指導者の一人となっており、カンザスでの戦いを終えていた時だった。Brown は長時間にわたって Thoreau に、カンザスでの Black Jack の戦いについて話した。このとき、ちょうど西部での講演を終えて帰ってきた Emerson が Thoreau を訪ね、Brown に紹介されたという(Harding 415)。
7. Emerson の奴隷制に対する攻撃は、主として逃亡奴隷法取締法とジョン・ブラウンの反乱に対する反応であったが、奴隷制に対する Emerson の関心は古く、1822 年の日記に遡る(『奴隷制とアメリカ浪漫派』123)。
8. 1854 年のカンザス・ネブラスカ法によって、カンザスとネブラスカが奴隷州となるか自由州となるかは住民の意志に任せることが決められていたのだが、その結果、カンザスは奴隷制賛成論者と反対論者の間で争いが起き、激化した。1855 年に Brown は息子を連れて、奴隷制廃止に努めるべくカンザスへ渡った。その後すぐに Brown は"Liberty of Guards"と呼ばれる集団の指導者となり、奴隷廃止論者であった"Border Ruffians"の強豪な武力を破った(Peterson 5-6)。
9. 重松勉が論じるように、Thoreau が Brown 弁護に徹した裏には「当時の奴隷制度に関する諸問題を解決するのに必要な清教徒的倫理の確立を求める傾向が超絶主義者の間に見られた」(101)ことも否定できない。しかし Thoreau は、黒人奴隷制度だけではなく、それを容認しているも同然であった北部の人間そのものが奴隷化している情勢を批判していることから、Brown 弁護の一背景には、奴隷化した人間の精神を呼び覚ませ、復活さ

せようとする Thoreau 自身の理想主義的な意図が窺われる。

10. その後年、1854 年に講演した"Slavery in Massachusetts"において Thoreau は希望を託すものとして「スイレンの香り」を挙げ、その芳香を、逃亡奴隷法やカンザス・ネブラスカ法という"the slime and much of earth"(108)に打ち克つような、毅然とした自然の法則を喩えている。Thoreau が、人間の行いもいつかその香りを放つときが来るのだと一筋の希望を抱いている点には、もはや人間ではなく自然にしか、そのような希望を見出せない Thoreau の心境が垣間見られるが、泥の中から成長したスイレンの芳香は、悪法が支配する祖国の中で、毅然として良心的行動をとった Brown に重ねられるといえるだろう。

引用文献

Dean Bradley P., and Ronald Wesley Hoag. "Thoreau's Lectures After Walden: An Annotated Calendar." *Studies in the American Renaissance 1995.* Ed. Joel Myerson. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. 241-362.

Glick, Wendell. "Introduction." *Great Short Works of Henry David Thoreau.* Ed. Wendell Glick. New York: Harper & Row, Publishers, Inc., 1982. 358-378.

Gougeon, Len. "Thoreau and Reform." *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau.* Ed. Joel Myerson. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 194-214.

Harding, Walter. *The Days of Henry David Thoreau: A Biography.* New York: Dover, 1982.

McGinty, Brian. *John Brown's Trial.* Cambridge: Harvard UP, 2009.

Peterson, Merrill D. *John Brown: The Legend Revisited.* Charlottesville: U of Virginia P, 2002.

Petrulionis, Sandra Harbert. *To Set This World Right: The Antislavery Movement in Thoreau's Concord.* New York: Cornell UP, 2006.

Thoreau, Henry David. *The Journal 1837-1861.* Ed. Damion Searls. New York: The New York Review of Books, 2009.

---. "Life Without Principle." *The Higher Law: Thoreau on Civil Disobedience and Reform.* Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 2004. 155-179.

---. "A Plea for Captain John Brown." *The Higher Law: Thoreau on Civil Disobedience and Reform.* Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 2004. 111-138.

---. "Resistance to Civil Government." *The Higher Law: Thoreau on Civil Disobedience and Reform.* Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 2004. 63-90.

---. "Slavery in Massachusetts." *The Higher Law: Thoreau on Civil Disobedience and Reform.* Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 2004. 91-109.

---. *Walden and Resistance to Civil Government.* Ed. William Rossi. New York: Norton, 1992.

---. *The Writings of Henry David Thoreau.* Vol. 20. Ed. Bradford Torrey. Boston: Houghton Mifflin, 1968.

Zinn, Howard. "Introduction." *The Higher Law: Thoreau on Civil Disobedience and Reform.* Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 2004. ix-xxx.

小野和人.『「ソローとライシーアム」—アメリカ・ルネサンス期の講演文化』. 東京：開文社、1997.

重松勉.「奴隷解放こそ神への最大の奉仕—ソローの社会参加と良心的反逆精神」.『生きるソロー』. 重松勉. 小野和人. 西村正己. 東京：金星堂、1986. 45-102.

フライマーク、ヴィンセント. バーナード・ローゼンタール.『奴隷制とアメリカ浪漫派』. 谷口陸男監訳. 東京：研究社、1976.

ベルトラン、クロード＝ジャン.『アメリカのマスメディア』. 松野道男訳. 東京：白水社、1977.